

ペーペルコロン異聞 — 『魔法の山』の南へ—

田村和彦

はじめに

現在のドイツの子供たちが教室で、ドイツで一番高い山は、と問われれば、ツークシュピッツェ (2962 メートル) という答えが一斉に返ってくるに違いない。しかし 20 世紀初頭から、第一次大戦終了前の子供たちであれば、躊躇なくこう答えたはずである。「キリマンジャロ!」。なぜアフリカの最高峰がドイツで一番高い山なのか、といぶかる向きもあるかも知れない。実はキリマンジャロは 1902 年から 1918 年までドイツに所属し、その最高峰キボ (標高 5893 メートル) は時のドイツ皇帝の名をとってカイザー・ヴィルヘルム・シュピッツェと呼ばれていたのである。もともと、赤道直下にありながら山頂は雪に覆われたこの山塊の存在をはじめてヨーロッパに報告したのはドイツ人宣教師ヨハネス・レープマン (1820-1876) で、1889 年にキボ峰を最初に極めたのもドイツ人の地理学者ハンス・マイヤー (1858-1929)¹⁾ である。なにも最初の発見者や登頂者の国籍が山の所属を決めるわ

1) Vgl. Alexander Honold; Kaiser-Wilhelm-Spitze In: A. Honold, K.R.Scherpe (Hg.) Mit Deutschland um die Welt. Eine Kulturgeschichte des Fremden in der Kolonialzeit. J.B.Metzler Vlg. 2004 S.136-144 ちなみにマイヤーはドイツで 19 世紀に刊行が始まり、現在も版を改めているマイヤー百科事典 (Meyers Konversationslexikon) を刊行した出版業の一族である。ハンスもこの事業を引き継いだほか、地理学者として世界各地を探索する探険家でもあった。バブア・ニューギニアには彼の名を冠した山脈が現存する。

けではあるまいが、少なくとも当時のドイツにはそれを主張すべき根拠があった。すなわち、キリマンジャロの山塊を含むアフリカのヴィクトリア湖から東のインド洋沿岸までの広大な地域（現タンザニア、ルワンダ、ブルンジを含む）は19世紀中葉からの植民地獲得競争の中でイギリスとドイツによって領有され、1890年には正式にドイツ帝国植民地となり「ドイツ領東アフリカ」と呼ばれたのである。ライプチヒ大学の地理学教授で、帝国植民地協会の主要メンバーでもあったハンス・マイヤーのキボ峰初登頂は、イギリス領とドイツ領にまたがるキリマンジャロ山系の最高峰をどちらが領有するかという、ナショナリズムに基づくあからさまな植民地的野心のもとに企てられた。

トーマス・マンの小説『魔法の山』（1925年）をふたたび論じるにあたって、わざわざ植民地時代の事跡を引っぱりだしたのには理由がある。すでにほくは『魔法の山に登る』²⁾で、第一次世界大戦直前のヨーロッパを背景とする地理的な構図に目を向け、この小説を「移動と交通の物語」と規定した。舞台となるスイス・アルプス山中のサナトリウムは、外部の世界から隔離されたかに見えるながら、実は世界中に張りめぐらされた鉄道をはじめとする交通網と情報網にとりこまれた、人とモノの移動の交点である。そこには当然、同時代の帝国主義列強による植民地分割の問題も射程に入ってくる。エドワード・サイードの卓抜な言い方を借りれば、この小説においても、「芸術を地球的で地上的なコンテクストにおかなければならない」³⁾。一見植民地的な営為には直接かかわらないかに見えるトーマス・マンという作家が「どのように帝国の領土と境界とを<想像>したのか」が問題になる。この観点から見ると『魔法の山』は、ヨーロッパを中心とする同時代の植民地的な利害と関心を反映した、「地球全体を視野に入れる世界観」（サイード）⁴⁾に基づいた小

2) 田村 和彦『魔法の山に登る ―トーマス・マンと身体―』関西学院大学出版会 2002年、とりわけ第一章「『魔法の山』の地図」。また、小論と近い問題設定をした論文として「魔法の山の東へ」（日本独文学会研究叢書041「トーマス・マン『魔法の山』の「内」と「外」」2006年所収）がある。

3) エドワード・サイード『文化と帝国主義』1（大橋洋一訳 みすず書房 1998）37ページ

4) サイード 上掲書 154ページ

説として読むことができるのである。『魔法の山』をそうした関心から見ていくには、小説の終盤に登場するオランダ人ミュンヘルン・ペーベルコロンを見るに如くはない。小論はこの特異な登場人物にスポットをあてて、『魔法の山』の植地的な成分を論じ、ドイツを含むヨーロッパがこの時代に構築した政治的・文化的地理の一角にマンの作品を位置づけようとするものである。

I

はじめに、1918年以前のドイツの海外植民地について一瞥しておこう。ドイツが他のヨーロッパ諸国に伍して海外植民地の獲得を目指すのは19世紀も半ばを過ぎてからである。1871年のドイツ帝国樹立の前は、私企業や個人による開発や貿易が行われたにすぎない。⁵⁾ドイツが本格的な植民地獲得と経営に乗り出す画期となったのは、1884年にベルリンで開催されたいわゆるコンゴ会議である。ベルギーのレオポルド2世がコンゴ川流域を私的植民地にしたことをきっかけとするこの会議では、アフリカ分割競争に加わっていたイギリス、フランス、ドイツ、ベルギー、ポルトガル、スペイン、イタリアのほか、オーストリア、デンマーク、アメリカ、オランダ、スウェーデン、ロシア、オスマン帝国など合計14カ国が参加し、これら「当事者国」によるアフリカ領有が決められた。その結果ドイツはアフリカにおいてすでに私的な開発と領有を始めていた西南アフリカ（現ナミビア）、トーゴ、カメルーン、東アフリカを保護領としたのである。一方、アジアにおいてもほぼ時期を同じくして、ビスマルク諸島、ニューギニア、東サモア、青島（チンタオ）がドイツ領として認められた。他国から遅れた植民地獲得を積極的に進めたのはヴィルヘルム2世（在位1888-1918）で、弱冠29歳で即位したこの王はイギリスの3C政策に対抗して3B政策を打ち出すほか、「ドイツの未来は海上にあり」という

5) 代表的なものとして、サモア経営に先鞭をつけたハンブルクの貿易会社ゴーフロイ、Handelshaus Godeffroy、アフリカへの定期航路（Woermann-Linie）を開いたヴェールマン商会、ドイツ領東アフリカを私的な植民地として開発したカール・ベータースがあげられる。

モットーのもと、海軍領土の獲得にも熱心だった。『魔法の山』の背景をなす1907年から14年までの期間に近接する事件としては、1905年にモロッコの領土保全と門戸開放のための列強会議の開催を求めてヴィルヘルム2世みずからタンジール港を訪問した第1次モロッコ事件と、1911年にモロッコ内乱に対するフランスの出兵に応じてアガディール港にドイツ軍艦を派遣した第2次モロッコ事件があげられよう。植民地にかかわるこうした緊迫した政治的布置の中に『魔法の山』は置かれているのである。その緊張の高じた果てに世界大戦という未曾有の破局が迫っていることは言うまでもない。ちなみにドイツは1918年の敗戦によって上記の海外植民地をことごとく失う。

とはいえ『魔法の山』にはドイツ帝国の植民地支配を直接うかがわせるようなエピソードがめだつわけではない。アフリカに関わるものとしては、「エジプトの女王」と呼ばれる女性患者や、モール人の黒人も現れるが、ごくわずかな言及にとどまっている。見ようによっては、それらはこのサナトリウムのインターナショナルな雰囲気の特徴づけるエキゾチックな図柄にすぎない。ところが小説の終盤、オランダ人の大富豪ミュンヘルン・ペーペルコルンが登場するに及んで、植民地世界が一挙に前景に出てくる。王者のような相貌と巨大な体躯と有無をいわせぬ押し出しによっていきなりサナトリウムの世界に君臨し、主人公のハンス・カストルプに圧倒的な影響を与えるこの異形のカリスマ的人物については、従来はゲルハルト・ハウプトマンというモデルとの確執や、ディオニュソス、ヴァグナー、キリスト、ニーチェ、はたまた異教的司祭などを引きあいに出した神話的・思想的関連において論じられることが多かった。むしろほくがここであらためて注目したいのは、この人物に関わる植民地的属性である。

まず、「ジャワの引退したコーヒー農園主」⁶⁾であること。マレー人の家僕を引連れてやってくるこの植民地経営者は、熱帯の植民地での長い滞在の結果、肌の色

6) Thomas Mann: Der Zauberberg III-758. トーマス・マンの『魔法の山』からの引用は以下、S.Fischer版の13巻全集の第3巻による。(Thomas Mann, Gesammelte Werke in 13 Bänden. S. Fischer Verlag, 1960,1974)

も「有色人種めいて」いて、すべてがヨーロッパに暮らす白人の基準から大きく逸脱している。「王者のようだ」と形容されるものものしい相貌⁷⁾は生まれつきのものというより、ヨーロッパとはまったく異なる風土（気候、土壌、食物）での長期間の生活と過度の享楽によって蒙った病的な変成、老化もしくは荒廃の結果と見ていいだろう。それにしてもなぜジャワなのだろうか。

植民地との関連で簡単にジャワ史をたどっておこう。現在はインドネシアの一部であるジャワ島がヨーロッパと関係を結ぶのは16世紀である。1520年にポルトガルとジャワが交易協定を結び、1596年からはオランダが登場する。1742年にはバントムがオランダ東インド会社の封土となる。1755年には全島が二分され、1811年には一時英国の占領下になるが1815年再びオランダ領（蘭領インドまたは蘭領東インドと呼ばれる）になり、その後日本が侵攻する1942年まで、長期にわたってオランダによる領有支配が続く。その間、この島は最初オランダ東インド会社、後にはオランダ政府によって経営されるプランテーションの中心地となり、コーヒー、茶、米、肉桂、サトウキビ、タバコ、コショウ、ウチワサボテン（飼料用ならびにコチニール色素の生産用）、そしてキナノキ（後述）などの大規模な栽培が行われた。それには熱帯にありながらゼロメートルから3000メートル以上までの標高差を含むジャワ島の風土が温順で、冷涼な高地にも恵まれ、多種多様なプランテーションに好適だったこともあずかっている。ジャワにおいて特筆すべきは、オランダがプランテーションの経営にあたって導入した強制栽培（輸出向けの農産物の生産を現地農民に強制し、強制栽培期において賦役労働を課す制度）のシステムで、オランダはこれによって膨大な利益⁸⁾をあげたとされる。「とてつもない大富豪」

7) Der Zauberberg III-763 ほか

8) 宮本謙介氏の「モノカルチャーへの道：植民地ジャワ」(『講座世界史』4 東大出版会 1995 所収)によれば、1840年から74年までの間に強制栽培制度によってオランダの純益は7億8000万ギルダーに上ったとされる。これはジャワ戦争（ディボネゴロの乱）に要した戦費や東インド会社以来の累積債務の総額1億7000万ギルダーを差し引いても、なお純益6億ギルダーを余すものであったという。この制度は現地農民を圧迫する収奪制度として国際的な批判を招き、1870年からは農業二法（農地法と農地令）を画期として、植民地政庁主導型の強制栽培制度から、私的資本の植民地進出を促す、産業資本、農業資本の利害に沿った植民地経営への転

とされるペーベルコルンの財源がどこにあったか、明らかであろう。ちなみに彼が営んでいたとされるコーヒー農園のコーヒー樹は1699（1696とも）年にオランダ東インド会社がプランテーションのために南アメリカから移植したものである。

しかし、ジャワ島からは植民地経営に先立ってより重要な問題が浮かびあがる。すなわち、ヨーロッパ人が「熱帯」という地域をどうとらえ、それにどう対処したかという問題である。

地理学的に言えば熱帯とは、南北両回帰線に挟まれた北緯および南緯23度27分間の地域をさす。ここでは太陽光線が地表に対して垂直に当たるため、年間を通じて高い気温が続く。そもそも古代ギリシャの地図では熱帯は太陽の直下で海が沸騰する無住の地とされていた。大航海時代にヨーロッパ人がこの未開の地域を「発見」して以来、熱帯は動植物が旺盛に繁茂し、労働をしなくてもよい安楽な生活条件に恵まれた無病と長寿の地とされ、常夏のパラダイスとして憧れをかきたてる。しかし旅行や居住によってこの地域の実態が明らかになると、あまりにも異なる気候風土のため、ヨーロッパ人にとっては適応することが困難な、忌避すべき地帯とも考えられるようになる。tropicsと並んで、19世紀終わりまでこの地域を一般的に指した英語のtorrid zoneのtorridとは「焼け焦げた、炎熱にさらされた」の意味であり、楽園とはおよそ縁遠い、煉獄のイメージに結びついている。容赦なく降り注ぐ直射日光に加え、この地域の高温と多湿は人間生活に有害な自然条件であり、疫病のもととなるミアズマ（瘴気）を生むという説が広がった。実際、熱帯にはマラリア、コレラ、デング熱、睡眠病、黄熱など西欧には未知の病気（熱帯病）があり、特に白人に対して高い罹患率と致死率を示すそれらの病気は、渡航はもとより現地での生活を困難にするだけでなく、帰国者や渡来した原住民によって熱帯から持ち帰られて本国に深刻な影響を与えかねないとされた。それゆえこの地域は「白人の墓」とまで呼ばれたのである。もちろん現代の医学に照らしてみても、先にあげた病疫が熱帯に多い風土病であり、この地域が各種の病原微生物やそれを媒

換が図られた。その後ジャワは砂糖とコーヒーを中心とするプランテーション体制へと移行する。

介する動植物の成育や繁殖に適していることから、さまざまな病疫の発生と流行を助長しやすい自然条件を備えていることは事実であろう。ただし、19世紀末から20世紀初頭にかけてこれらの病疫が細菌や原虫によって媒介・伝染することが明らかにされるまで、「熱帯病」は高温、高湿度、動植物の腐敗などの条件が重なり合って生み出される毒性の強いミアズマから生まれるこの地域特有の病気である、という認識が一般的であった。医学的に見ても、環境と病気の関係を重視するヒポクラテス以来の地誌的・環境主義的パラダイムによって、熱帯は恐るべき病気の巣窟であり、文明生活には不向きな土地として囲いこまれていくのである。その結果「衛生的で清潔な」温帯のヨーロッパと、「非衛生的で不潔な」熱帯のアジア・アフリカという地理的対比が固定されていく。⁹⁾

もちろん熱帯に関するこうした否定的なイメージの増殖は、植民地支配を軸にしたヨーロッパ側からの偏見に起因することを見る必要がある。ある土地なり地域は、ヨーロッパのために富と財を生み出す空間に組み入れられ、進出するヨーロッパ人にとって住みうるか住めないか、収奪が可能か可能でないか、有用か無用か、だれが支配しだれが支配されるか、という判断基準で世界の中でマッピングされるのである。その際、ある土地が（ヨーロッパ人にとって）健康か否かという病理学的な視点も重要になる。それは植民地が拡大し、ヨーロッパ人が現地で生活せざるを得なくなることで、より切実な問題となった。19世紀に記述される医学的地誌においては、熱帯の生物は温帯の生物とまったく異なるだけでなく、異様で病的な成長を示すとされ、さらに社会ダーウィニズムの言説を受けて、変化も進歩も知らない熱帯の環境におかれるとヨーロッパ種の生物が「退化」する可能性まで示唆された。それによれば人間もまた、この環境下で人間は肉体的に変調をきたすだけでなく、道徳的にも退化・墮落し、感情が鈍磨し、怠惰になるのである。貧困と不潔はその

9) 帝国主義時代の文学における「熱帯」および「病気」の表象については次の英文の著書2点に多くを教えられた。

-Alan Bewell, *Romanticism and Colonial Disease*. The Johns Hopkins University Press. 1999

-Felix Driver and Luciana Martins (ed.), *Tropical Visions in an Age of Empire*. The University of Chicago Press. 2005

退化の結果でもあるとされた。不潔で道徳的にも墮落しているばかりでなく、病気を発現させる空間としての「熱帯」はこうして、ヨーロッパ人にとって危険な空間として囲いこまれ、同時に「文明」（近代の医学や公衆衛生、教育や布教）によって開明・治癒すべき対象ともなるのである。

支配する北と支配される南、「健康な」温帯と「病んだ」熱帯。この布置はしかし19世紀も末期になると固定的なものではなくなる。植民地世界が地球規模にまで拡大し、交通網の発達と交易の活性化にともない人とモノの移動が加速するにつれて、西欧の支配によって囲いこまれ、鎮撫されたかに見える「かなた」の世界である熱帯がますます文明世界に接近し、時にはその境界を破って「こちら」に接触し、「こちら」を浸潤する可能性が生まれてきたのである。この危機は具体的には異人種、怪物、伝染病の形をとって、海を超えてやってくる「異物」^{エイリアン}の来襲としてイメージされる。それは必ずしも支配し収奪する側が支配される側に対して抱くやましい思いから来る悪夢や妄想とばかりは言えない。

II

ヨーロッパにとっての「熱帯」の問題をごく簡単に素描したが、ペーベルコルンがいかに深くこの問題圏にとりこまれているかがわかるだろう。この元コーヒー農園主が、東インド会社からオランダに引き継がれた植民地ジャワの利得を存分に享受した人物であることはすでに述べた。突然の憤怒に駆られたペーベルコルンが「ふがない奴隷どもめ！」と取り巻きをどなりたてる、植民地の暴君を思わせるエピソードもある¹⁰⁾。大物にふさわしく、到着当初から金に糸目をつけない派手な饗宴を催してはサナトリウムの滞在者たちの度肝をぬく彼ではあるが、この椀飯ぶるまいが単なる贅沢や濫費ではなく、絶えず刺激と興奮を肉体に与えて人生を活性化するために行われることも見ておくべきだろう。(刺激物にはコーヒーや強いアルコールのほか、毒薬、さらに女性まで含まれる。)逆に言えば、長期の植民地生活で疲

10) Der Zauberberg, III-793.

弊・衰弱した肉体は容易に「意気阻喪、昏睡、無感覚」¹¹⁾の症状を示し、強い刺激なしには維持しえない。突発的な憤怒や不明瞭な言語も「退化」の顕著な特徴である。というより、ペーベルコロンの肉体そのものが、熱帯で得た病氣 — マラリアによる変性の産物なのだ。

ペーベルコロンの病氣については、マラリアという病名が使われているわけではない。ただし、「悪性の熱帯熱 TROPENFIEBER」、「間歇熱 Wechselfieber」、「四日熱 Quarantanfieber」と呼ばれるこの病氣がマラリアであることはほぼ間違いない。「ペーベルコロンの熱」と題された論文でシュテファン・ベッサーがこの病氣について興味深い分析を行っている。¹²⁾ それによれば、この元植民地経営者の病氣とされる「熱帯熱」はマラリアの研究史では19世紀終わりに現れた比較的新しい用語で、医学・細菌学におけるマラリア研究の急展開を反映しているという。それまではマラリアが熱帯特有の病氣であることは通念ではなく、悪性の瘴氣 (mal aria) によって生じる、どこにでも起こる病氣とみなされていたのである。「熱帯熱」の呼称が使われる以前、この病氣は症状によって「毎日熱」「三日熱」、「四日熱」「恒常熱」などに区分されていただけで、特に「熱帯」とは関連づけられなかった。マラリアへの理解が大きく変わったのは、1880年にフランスの軍医ラヴェランがマラリア原虫を発見し、続いて1890年代にイギリスのマンソン／ロスがアノフェレス属の蚊であるハマダラカによってこの原虫が媒介される感染経路を解明したことによる。研究の進展によってさらに、マラリア原虫には三日熱マラリア原虫、四日熱マラリア原虫、卵形マラリア原虫および熱帯熱マラリア原虫の4種類があって、各原虫により特徴的な発熱発作があることも解明された。このうち熱帯熱マラリア原虫は熱帯でのみ発見され、それによって起こる熱は間歇性をもたず、突発的で不規則で、致死性があるのはこのマラリアだけである。そのためにこの病氣は特に「熱帯熱」もしくは熱帯性マラリア *malaria tropica* と呼ばれるのである。

ベッサーによれば、ペーベルコロンの病氣は間歇性の四日熱と熱帯熱が合併した、

11) ebd. III-788.

12) Stephan Besser, Peeperkorn's Fever (In: arcadia Band 38. Heft 2, 2003 p.257-263)

当時の医学では「非常にまれ」とされたもので、マンはこの人物の熱帯での経歴とその「間歇的」症状を描くために両者を用いていると思われる。これも興味深い指摘で、実際ペーペルコルンの熱の発作はほぼ四日目ごとに繰り返され、この熱が去ってから三日間、彼は饗宴をはじめ王者のようにあらゆる欲求を満足させることができる。精力と生命力の減退を感じた彼が自殺するのが、やはり四日熱の回帰する日であるのも偶然ではない。ベッサーによればペーペルコルンの示す「性的不能と性欲の欠如」と「言語の乱れと失語症もしくは不全失語症、くちごもり」もマラリアの典型的な症状として、1918年当時の医学文献にあげられているという。¹³⁾

マラリアにかかわる重要な産品にも目を向けておこう。たとえばペーペルコルンが濃いコーヒーをのべつ口にするのも、毎食前にジンをあおるのもマラリアから来る熱を緩和するためである。ジン (Genevar) はジュニパーベリー (杜松子・ネズの実) の独特の香味をつけた蒸留酒だが、もとは17世紀半ばオランダはライデン大学医学部教授シルヴィウスが杜松の実の利尿効果に注目して植民地での熱病の薬として調剤した薬用酒である。(それが17世紀末、オレンジ公ウィリアムの時代にイギリスに伝えられ、安価ゆえにジン禍を生むまでに大衆に広まった。)

とはいえ、マラリアに直接結びつく熱帯の産品といえば、キナノキとそれを精製して作られるキニーネをおいてほかない。この植物については小説の中でペーペルコルン自身が蘊蓄を傾けているので、まずそれを引こう。

「さよう、すばらしい薬である、この熱の皮は！一ちなみにわれわれヨーロッパの薬物学がキナ皮を知ってからまだ300年にもならないし、キナ皮の有効成分であるアルカロイド、つまりキニーネが化学によって発見され、ある程度まで分析されてから、まだ100年にもならない。ある程度というのは、化学は現在のところキニーネの組成について十分に解明したとも、それを人工的に調合できるとも主張するまでには至っていないからである。」

「キニーネは薬ともなれば毒物ともなり、何よりもその力は絶大である。4グラムのキニーネは人間の耳を聞こえなくし、めまいを起こさせ、息苦しくさせ、アト

13) Besser, a.a.O.

ロビンと同じように視力障害を起こさせ、アルコールと同じように酔わせ、キニーネの工場で働く労働者たちは目に炎症を起こし、唇が腫れあがり、皮膚がかぶれる。次にペーベルコロンはキンチョナ、すなわちキナノキのことを話し、南米コルジリア山脈の原生林で標高3千メートルの高度に生育するこの植物の樹皮が『イエズス会士の粉末』という名前でスペインに渡ったのはずっとのちになってからで、南アメリカの原住民たちはその効力をずっと以前から知っていた、と語り、さらにジャワにおけるオランダ政府による大規模なキナノキ栽培のことを話した。ジャワからは毎年肉桂に似た薄赤いキナ皮の円筒が何百万ポンドもアムステルダムとロンドンへ積み出されるそうだった。…キナノキではだいたい樹皮、樹皮組織、つまり表皮から形成層までの部分に力が秘められていて、良くも悪くもほとんど常にダイナミックな力を宿すのだ、とペーベルコロンは続けた。]¹⁴⁾

この解説をもう少し補足すれば、オランダ政府の依頼でキナノキをジャワに移植したのはドイツの植物学者ユストゥス・カール・ハスカルル (1811-1894) である。ハスカルルはキナノキを採取するために1829年にアンデス山中に分け入り、当時輸出が禁止されていたこの植物の種子と幼木を極秘でライデンに送り、それがオランダ経由でジャワに送られたのである。ハスカルルはさらに1854年にみずからジャワに渡って現地でキナノキの馴化と栽培に取り組む。原産地に近い標高1500メートル以上のジャワの熱帯高地の冷涼な地形を生かしたこの栽培法が奏功して、1864年には本格的なプランテーションが始まり、最盛期の1930年にはジャワの産出するキナ皮は一万トンにのぼり、世界の需要の97%を満たしたとされる。¹⁵⁾ こうしてジャワは医薬品によっても世界とつながるのである。

言うまでもなくキナノキは歴史を変えた植物のひとつである。16世紀のスペイ

14) Der Zauberberg, III-800f.

15) キナノキの伝播・栽培史については、インターネット上で公開されている以下の論文を参照した。Jutta Hermann: Chinalinde. Eine historische Reise um die Erde (<http://www.pharmazeutische-zeitung.de/fileadmin/pza/2001-18/titel.htm>) Zugriff am 12.01.09
キナノキについてはヘンリー・ホプハウス『歴史を変えた種 — 人間の歴史を作った5つの植物』(阿部三樹夫、森仁史訳 パーソナルメディア 1987) にも詳しい。

ン人によるペルー征服の過程で「発見」されたキナノキの樹皮は、熱帯性の熱病の治療に絶大な効果を示す特効薬としてヨーロッパに伝わり、熱帯への渡航や現地での滞在の必需品となる。19世紀に西欧列強がアジア・アフリカに進出するにあたってマラリアは最大の障害であり、熱帯地域に渡航・駐留するヨーロッパ人の死亡原因の第一位を占めた¹⁶⁾。そのために、熱帯で生活するにあたってキニーネは不可欠の薬品となり、植民地経営が本格化するにしたがってその需要もますます拡大したのである。少なくとも合成薬が開発される1930年代までキニーネはマラリアの予防と治療の唯一の手段だった。

III

問題は、植民地経営者ペーベルコルンとマラリアが『魔法の山』のなかでどう位置づけられるかである。この小説の舞台となる第一次世界大戦前の「国際サナトリウム」が、交通網と情報網によって外部の世界と結びつけられていることは冒頭にもふれた。サナトリウムを中心とする世界地図はただし、中立的に描かれているわけではなく、特有の方位と配置を持っていて、ヨーロッパを中心に、西と東が相拮抗する世界として描かれている。トーマス・マンがこの布置を、「中間の国」ドイツという政治的・文化的主題を変奏するためのイデオロギー的枠組みとして十全に利用していることはいまでもない。西のラテン的ヨーロッパを代表するのがイタリア人の人文主義的啓蒙家セテンブリーニであり、一方、アジアを含む東の世界は、小説の前半ではロシア人ショーシャ夫人に、後半ではユダヤ人のイエズス会士ナフタによってそれぞれ代弁される。「ヨーロッパ的原理」と「アジア的原理」が対抗

16) マラリアについては、脇村孝平：「アノフェレス・ファクターとヒューマン・ファクター」（見市、斉藤、脇村、飯島編『疾病・開発・帝国医療』所収 東京大学出版会 2001）が示唆的である。植民地の発展をはばむ元凶とされたマラリアはいまだにアジア・アフリカ諸国で猛威をふるっているが、この病気が実はヨーロッパの進出とともに広がった開発原病であることも見逃せない。マラリアについてはほかに、脇村孝平：「植民地統治と公衆衛生 —インドと台湾—」（『思想』878号所収 岩波書店 1997年8月）フレデリック・F. カートライト『歴史を変えた病』（法政大学出版局 1996）にも多くを教えられた。

するこの象徴的地図の上で、東方は無意識、性、病気、怠惰（反動、蒙昧、無為、否定、解体、カオス、病気、闇）といった連想と結びつく未開の領域であり、西方は労働と勤勉と覚醒（啓蒙、理性、進歩、秩序、労働、健康、光明）を原理とする文明の世界として意味づけられている。後者を擁護するセテンブリーニは、病人たちが集まるサナトリウムをヨーロッパの勤勉に敵対するアジア的（もしくは東方的）原理による侵食の最前線と見て、「アジアはまさにわれわれを呑みこもうとしている」¹⁷⁾と警告を発する。

ペーベルコロンの登場はこの世界観の対立と象徴的地図においてどう位置づけられるのだろうか。この人物を前にすると、東と西を擁護するナフタとセテンブリーニの苛烈なイデオロギー的論争は「とたんに火がつかなくなって」二人の人物は影が薄くなる。¹⁸⁾ 分析的理性を駆使した論理が「空疎なおしゃべり」として退けられ、言葉よりも肉体が、覚醒より陶酔が、節制より度を過ぎた享楽が重視されることからすれば、ペーベルコロンが思想的には「東」の陣営と親和性を持つことは明らかだろう。というより、この人物の経歴に含まれ、肉体に書きこまれた「南」（熱帯）の成分は、「東方」の発する危険と誘惑を具体化し、「アジア的原理」による浸潤をより過激なものにする。それまでは、ラテン、ユダヤ、ゲルマン、ロシアなど、どちらかといえばヨーロッパの版図の中で想定されていた『魔法の山』の地図はペーベルコロンの登場によって一気に世界規模に拡大し、しかもその重心は大きく南に傾くのである。

この変化は医学・病理学的にも説明できる。サナトリウムは主に結核患者が集まる療養施設であるが、病像がはっきりせず比較的緩慢に症状が進行する結核は、特效薬が普及するまでは長期の療養を必要とする病だった。そのために『魔法の山』の主人公は結局は7年間もこのサナトリウムに滞在するのである。ほかの登場人物もたいていは長期療養を要する結核患者であり、皮肉な見方をすれば彼らの繰り広げる衛学的「おしゃべり」も、人生に悩む主人公の狐疑逡巡や愛のかけひきも、も

17) Der Zauberberg, III-339

18) ebd. III-818

とは高山に設けられた高級保養施設の隔離された環境で保障される無為と長大な時間によって可能になったものだろう。症状の一定しない、未決囚の拘留を思わせる長期間の宙吊り状態がこの病気の特徴である。

それに対しマラリアは、ペーペルコルンの症状で見たとおり、突発性の熱が間歇的に繰り返される病気である。その熱も「ほかの患者たちの熱が描く民主的で平凡なカーブとは異なり、噴出するような、エクスタシーを思わせる熱」¹⁹⁾である。瘧(おこり)のような高热と、異常な興奮・狂騒と「意気阻喪、昏睡、無感覚」の交代を伴うマラリアは病像としても結核とはまったく異なる。特に注目すべきは、結核が市民社会と共存しながらそれを内部から静かに蝕む病であるのに対し、マラリアは「熱帯」という外部から持ちこまれた疫病として表象されていくことである。

マラリアはギリシャ・ローマ時代からヨーロッパでも定期的な流行が観察された疫病である。それは沼沢地の高湿度の瘴気(ミアズマ)から生じる風土病の典型とされ、ローマ帝国の衰亡もマラリアの流行による肉体的衰弱と出生率低下、精神的倦怠や道徳的退廃に起因するという説さえある²⁰⁾。高湿度の沼沢地が存在すれば、比較的高緯度のイギリスなどにも罹患者をみたマラリアが「熱帯」という地域に特に結び付けられるようになるのは、18世紀末以降、この病気が列強による熱帯植民地の開発と経営の大きな障害として立ちはだかったためであることはI節で述べた。マラリアを熱帯特有の風土病として特定し、その病因を解明する役割を担ったのが、植民地化の利害に直接結びついた「帝国の道具」としての植民地医療(colonial medicine)、とりわけ熱帯医療(tropical medicine)²¹⁾である。この医療分野は Deng 熱、睡眠病など、熱帯特有の疾病を「発見」し、その感染経路を解明すると

19) Besser: a.a.O.

20) カートライト 上掲書 11-12 ページ

21) 隣接した概念として帝国医療 imperial medicine がある。植民地医療は宗主国が植民地で行った近代医療一般を指すのに対し、帝国医療は、宗主国が植民地における疾病に対して行った治療実践と医療行政を展開し、調査研究を行い、その情報と知識を本国へと回収・集積し、それらを帝国の広がりへと還元する中で成立したプロジェクトであり、植民地における重要な統治技術だとされる。見市雅俊「病気と医療の世界史」(齊藤、脇村、飯島編『疾病・開発・帝国医療』所収)を参照。

もに、マラリア、コレラ²²⁾、黄熱など、既知の疾病を世界地図上の熱帯にマッピングした。

一連の熱帯病の発見とマッピングにドイツ帝国が深く関わっていたことにも注目したい。ドイツは植民地獲得競争においては他国に大きく遅れたが、熱帯医療の研究においては目覚ましい成果を示した。細菌学と公衆衛生学を融合した新しい医療分野を開いたのは、いうまでもなくロベルト・コッホ（1843-1910）である。コッホは炭疽菌の発見（1876年）を皮切りに、結核菌（82年）、コレラ菌（83年）を次々に発見して、ミアズマ説に替わる細菌学説（コンタギオン説）によって疾病観（病因論と予防法、衛生観）そのものに革命的な変革をもたらす。コッホに続く伝染病研究の進展によって19世紀末のドイツは、細菌学とその成果を応用した公衆衛生学と熱帯医学研究の世界的な中心に躍り出る。コッホみずからもアフリカやアジアの熱帯に何度も長期間分け入って病因と感染経路を探索する「細菌ハンター」であった。中近東やアフリカにおける長い探索の後、ついにアジアにおいてコレラ菌を発見して帰国したコッホは、ベルリンでまさに国家的英雄として歓迎を受ける。彼以降、特に「未開の」熱帯地域における細菌の発見は植民地獲得競争に劣らぬ、国家の威信を賭けた先陣争いの趣を呈するのである。

ちなみにマラリアもコッホの「狩り」の対象であり、原虫についてはフランスのラヴェランに（1880年）、アノフェレス蚊の雌を媒介とする感染経路についてはイギリスのロナルド・ロスに（1897年）先を越されるが、この医学者はおもマラリアの撲滅に執念を燃やしていた。東アジアも彼のマラリア研究のフィールドで、コッホはオランダ領ジャワのパタビアに1899年9月から12月まで、その後ドイツ支配下のニューギニアに1900年夏まで滞在して、マラリア発生と蚊の関係

22) 『魔法の山』に先立つトーマス・マンの小説『ヴェネチアの死』（1911）では、インドの熱帯沼沢地から発生したアジア性コレラ *cholera asiatica* が西へ進み、ヨーロッパに災厄をもたらす過程が主人公の破滅と同時進行する。以下の論文でほくはこの小説を公衆衛生学と疾病史の視点から考察した。Der gesunde Strand. Thomas Manns „Der Tod in Venedig“ im Licht der Hygiene. (『健康な浜辺 — 衛生学の見地から見た『ヴェネチアの死』) In: Neue Beiträge zur Germanistik. Band 4, Heft 6, S.70-86 (日本独文学会 2006年)

を疫学的に調査している。その結果、治療と予防にあたってキニーネを継続的に服用して人体内のマラリア寄生体を絶滅させる方法を最良のマラリア防遏法として提唱する。(ここでコッホとバーペルコルンは踵を接するわけである。)小論の冒頭に名をあげたキリマンジャロ山系の麓のヴィクトリア湖周辺はコッホ晩年のマラリアハンティングの最前線だった。『魔法の山』との関連で言えば、主人公の故郷の町ハンブルクにコッホの弟子のベルンハルト・ノホトによって、リヴァプール、ロンドンに続いて1900年に設立された熱帯医療研究所 (Institut für Schiffs- und Tropenkrankheiten 後に Tropeninstitut と改称) もあげるべきだろう。この研究所はコッホによるベルリンの伝染病研究所 (1891-1904) とともに、ドイツの植民地進出と海外移民の医療的拠点だった。

周辺の事実ばかりを列挙してきたが、細菌学・微生物学を後ろ盾とする熱帯医学は、コレラやマラリアなどの流行病の原因を熱帯に特定し、その予防手段を開発しただけではない。重要なのは、熱帯病の特定が病原菌による感染・伝播という疫学上のモデルを作り上げ、このモデルの上に「敵による浸潤」というメタファーが編み出されたことである。病原菌との戦いは頻繁に「人類 (もしくは文明) の敵との戦争」の隠喩で語られる²³⁾。この場合、「敵」とは微生物学的には顕微鏡によって可視化された病原菌や原虫をさすが、生物生態医学的には、病原菌や原虫が寄宿する相手 (蠅や蚊、鳥、豚、猿などの動物、感染者が所属する集団や人種²⁴⁾) や、その寄宿主をはぐくむ生活・自然環境、さらには伝播を媒介する物や環境にまで拡大される。こうして熱帯病の脅威は、隠れていた病原菌、寄宿主、さらにそれが棲息する熱帯という「目に見える敵」の文明世界への侵入とそれとの戦いという隠喩に

23) コッホの発言でもしばしば細菌の発見と流行病の撲滅は「文明の敵との戦い」とされる。トーマス・D・ブロック『ローベルト・コッホ: 医学の原野を切り拓いた忍耐と信念の人』(長木大三, 添川正夫訳) シュプリンガー・フェアラーク東京 1991

24) 黒人種がマラリアに感染しにくいことは植民地開発の初期から知られていた。そのために大量の黒人が中南米のプランテーションでの労役に奴隷として導入されたのである。黒人種がマラリアに罹患しにくいのは、医学的に見ればこの人種の大半が備える鎌状赤血球を含む血液の中ではマラリア原虫が生育・繁殖しにくいからである。そのかわり、黒人種は先天性の代謝異常である鎌状赤血球貧血症を持病として抱えている。

よって語られることになる。この隠喩は植民地を持つ、持たないにかかわらず、ヨーロッパ世界とそれに連なる「文明基準の」近代国家が政治的・文化的に共有するメタファーであったと思われる。先に述べたようにドイツは1918年の敗戦によって海外植民地をことごとく失うが、この「侵入・浸潤」モデルそのものは微生物とは別の「敵」—ユダヤ人—を想定して強固に存在し続けることを付け加えてもいいだろう。

ペーベルコロンの熱病も「侵入と浸潤」というメタファーによって語られる。悪性のマラリアを体内にかかえたペーベルコロンの存在そのものが、すでにヨーロッパの基準では手におえない巨大な異物であり、その突然の侵入は小説の精神的布置のみならず物質的布置までも一変させてしまう。この「異教の司祭」²⁵⁾は熱帯植民地の嗜好品や刺激物（アルコール、薬物、キニーネ）や生活習慣をサナトリウムの文明世界に持ちこみ、異種混交を促進するばかりではない。主人公をはじめ、ほかの滞在客たちにマラリアが感染するわけではないが、この病気特有の、異常な興奮・狂騒と「意気阻喪、昏睡、無感覚」の交代する症状は次第にサナトリウム全体に広がる様相を示す。ペーベルコロンの自殺の後に「巨大な鈍感」や「苛立ちの蔓延」²⁶⁾という、病理学的ともいえる表題を持つ章が置かれているのも偶然ではない。すでに「熱帯」は十分に広がっているのである。

小説の終幕で主人公が消えていく第一次大戦の戦場の風景にも熱帯による病気の浸潤の痕跡を読み取ることができる。主人公の7年間の滞在生活を突然打ち切る戦争は「長い間鬱積されていた鈍感と苛立ちが積もり積もったあげくの耳を聳するような爆音」、「地球のあらゆる屋台骨を震撼させる歴史的霹靂」²⁷⁾として、政治的な事件というより自然災害のように闖入するのだし、惨禍に見舞われたはるか下の低地から高地のサナトリウムにまで「焦げ臭いうっとうしい空気が低地からふきあげてくるように思われる」のはこの災厄が下から上へと浸潤してくることを示してい

25) Der Zauberberg, III-792.

26) „Der große Stumpfsinn“, „Die große Gereiztheit“

27) Der Zauberberg, III-984.

る。カストルブが姿を消す低地の戦場は、独仏両軍が激しい肉弾戦を繰り広げたフランドルの低湿地と思われるが、東とも西ともわからず、具体的な地名も時期も特定させないこの土地も異様な熱を帯びている。

「われわれはどこにいるのだろうか。(…) うす暗がり、雨と泥濘、火焰に焦がされた陰鬱な空。そこには止むことない轟音が殷々と響き、湿った空気を満たしている。ひゅうひゅうと鋭い音を立てて、地獄の番犬のように凶暴に飛んでくるものは、向かう先で炸裂し、はじけ、裂け飛び、焰を吹きあげ、その中からうめきと叫び、割れんばかりのラッパの咆哮、ますます早く打ち鳴らされる太鼓の連打が聞こえてくる。」²⁸⁾

砲弾が飛び交い、炎上するこの戦場に広がるのは、自然の諸力がすさまじい奔騰と衝突を繰り広げる、黙示録か神々の黄昏を連想させる光景である。しかしミアズマにも似た霧と砲火の炎熱につつまれ、泥濘と汚物にまみれた戦場は、敵と味方が区別を失い、肉体と肉体がぶつかりあい、戦闘と死によって交じり合う、なまなましい侵食と混交の現場でもある。実際、小説の最終部分にあたる4ページあまりの戦場の描写には、現実の戦闘に関わるものに混じって、病気や熱に関わる語彙や表現が頻出する。硫黄の臭気漂う沼地のような戦場を見えない敵めがけて遮二無二突撃するのは「三千人の熱に浮かされた青年たち」であり、彼らは「一個の大きな肉体として」「大量の瀉血に耐えて、それでもなお密集した部隊を形づくっている」²⁹⁾。しかし圧倒的な犠牲を払う戦闘は勝利の見こみのない消耗戦であり、しかも「敵」はごく近くにいなながらその姿を見せない。一進一退を繰り返す兵士たちの肉体の集団はやがて泥濘にうずもれ、あるいは砲弾の直撃によってあとかたもなく四散し「ごちゃ混ぜになって、消えうせる」³⁰⁾。こうして熱と病による浸潤は個々の肉体を越え、集合的な「世界を覆う死の饗宴」³¹⁾にまで拡大する。『魔法の山』で描かれてきた世

28) ebd. III-990.

29) ebd. III-991.

30) ebd. III-993.

31) ebd. III-994.

界地図は、最終場面の戦争において解体するのである。

冒頭でぼくは、一見植民地的な営為には直接かわらないかに見えるトーマス・マンという作家が「どのように帝国の領土と境界とを〈想像〉したのか」という問いを設定した。『魔法の山』がヨーロッパ内部の世界観的な対立だけではなく、植民地世界を含む「地球全体を視野に入れた」小説であることはいまや論をまたない。ただし、この小説においては「帝国の領土と境界とを〈想像〉し」、それを維持し保全するという「帝国の小説」（サイド）の構造は最終的には破綻する。この構造に風穴を開けるのが植民地経営者であった「非ヨーロッパ的な異物」としてのペーベルコロンであり、彼とともに闖入する一連の熱帯の表象である。筋だてからすればペーベルコロン自身は自殺するが、解体や混淆の可能性は必ずしも否定的にばかり扱われているとは見えない。ヨーロッパの範囲内に限定されたイデオロギー的対立ではもはや満足できない主人公がペーベルコロンに示す共感にもそれは伺われる。最終場面で描かれる戦場も、それが破壊と解体の現場であることは確かだとして、そこにはこの地球規模の浸潤に対する嫌悪や拒絶ばかりではなく、万物が呑みこまれ混淆する中から生まれてくるものへの漠然した期待が揺曳している。ただし、そこからなにが生まれるかは不明なまま小説の幕は閉じられる。こうして小説を「帝国以後」の世界の側に向けて開くこと、それが第一次大戦前に書きはじめられたこの「時代小説」が、戦争をはさんで1925年に至ってようやく終えられたことの意味だとぼくは考える。